


けやき

令和4年

2月

さいたま市立 大宮北小学校 学校だより

語る言葉を

校長 渡辺 明

年が明けたかと思えば早くも2月、毎日が目まぐるしく過ぎてゆきます。感染の第6波で、1月21日からまん延防止等重点措置が埼玉県に適用され、ニュースもコロナ関連の話題ばかりです。

そんな日々の中で、1月16日だけは違ったものになりました。南太平洋の島国トンガの海底で15日の午後に起こった大規模な火山噴火により、津波が発生したというニュースが報道されたためです。噴火の様子は気象衛星ひまわりの観測した映像も流れ、火山灰が約20キロの高さまで上がったという情報もありました。

15日夜の段階では、気象庁は日本への影響は若干の海面変動の可能性に留まると発表しましたが、日本周辺で大きな潮位変化が観測されたため、津波警報が出されました。多くの方が避難し、16日のテレビの画面には日本地図と警報・注意報が出された地域が映し出されました。その日、誰もが過去の震災の記憶を呼び起こされたと思います。翌1月17日は、阪神・淡路大震災から27年目の日でした。

これまでも様々な災害や事件による影響が学校現場にありました。2011年の東日本大震災、2009年の新型インフルエンザ、2001年の池田小事件、1995年の阪神・淡路大震災と地下鉄サリン事件、思い起こせばいろいろな対応をしてきました。今はコロナ対策で頭がいっぱいになりがちですが、過去の教訓も大切にしていかなければなりません。また、大切にすることで現在の状況への対処や、今後起こることへの備えになると思います。

東日本大震災が起きたとき、今の5年生はまだ生まれていませんでした。6年生の記憶にもないでしょう。けれども、当時のことを体験した者が、そのとき互いに助け合ったこと、近くの人を思いやったこと、不安の中で守り合ったことを言葉として語る事ができたらと思います。もちろん大変だったこともたくさんありますが、ちょっとした親切や、人の繋がりがありがたさが身に染みた、そんな記録には残らないけれど記憶に残ることもあったはずで。当時の勤務校で、震災の揺れの中、怖がる低学年の児童に、わんぱくだった高学年の男子が「大丈夫だから心配するな！」と頼もしく声をかけていた場面や、避難所対応中に保護者から職員室に届いた差し入れのカップ麺の温かさは今も忘れられません。

今、現在も同様です。このコロナ禍がやがて過ぎて、次第に記憶から薄れたり、体験していない世代が増えてきたときに、オンラインの画面越しでも気持ちが繋がって笑いあったことや、一緒に30秒数えながら手を洗ったことなど、ちいさなことであっても、きちんと語る言葉を覚えておきたいと思います。

少し文章が重くなってしまったので、違う話題を。この火山噴火の影響について、気象庁は会見で「本当に津波かどうか分からない」という異例のコメントを出しました。津波予測の範囲を超えた現象が観測され、理論としては分からないけれども、実際に潮位が変化しているということから、迅速に注意を呼び掛けた判断に、好意的な意見が多くみられるようです。なかでも「わからないことをわからないと、しっかり言えることは大事」という評価がありました。噴火の後に、日本の広い範囲で気圧が2ヘクトパスカル上がる変化が確認され、「空振」という耳慣れない言葉も登場しました。フィジーやトンガなどで確認された津波は海底火山噴火に伴う隆起によるもので、日本で起きた潮位変化は「空振」によるものだそうで、これは1883年インドネシアのクラカタウ島の火山の噴火以来の現象だそうです。

気象庁が「わからない」としたことで、多くの専門家が自発的に様々な知見を寄せ合って分析したとのこと。知恵を集めることの大切さを改めて感じました。まだまだ厳しい状況ですが、知恵を集めて前へ進んでいきたいと思います。



雪が降って大喜び (R4.1.7)